

備忘録「コロナとわたしと日本人」(7) (2021年2月7日記す)

はじめに

コロナをめぐる情勢は日々刻々と変わっていく。じっくり考えている間に、現実が先に進んでしまう。今回は日々メモしたことを、遡ってまとめた。

1 コロナ禍の意味するもの

①わたしは70代半ばを超えたが、今まで自分と家族の生命、身体に対する直接的な脅威に直面したことがなかった。今回は違う。自分と家族の生命、身体、今後の生活に対する直接の脅威に直面している。

コロナ禍は、誰にとっても、おそらく一生に1度しか遭遇しない様な重大な脅威である。少なくとも、戦争を体験していないわたしの世代にとってはそうである。

若い世代の人にも、是非、コロナ禍の類まれな脅威を知って欲しい。

②今まで人生の危機は何度も経験した。近親の死、何度かの入院、バブル崩壊、リーマンショックなど、公私にわたり人生の大事に何度も直面した。その度に、自分の力で何とか乗り切ってきたつもりだった。だが、今回は自分の力だけではどうにもならない。はじめて自分の無力を痛感する羽目になった。

③コロナは自然の摂理に従って動いている。わたしにはその動きをどうすることもできない。今まで経験した危機は、その本性上、わたしがどうにか解決できるものである。わたしが何とかできるものであった。

ところが、コロナは全く違う。コロナの拡大は、わたし個人の努力では止めようがない。コロナは、本性上、わたしのコントロール外にある。どうしようもない。それが今までの危機との決定的な違いである。

④コロナ禍は、また、政治的な意味合いも、並の政治スキャンダルや権力闘争とは全く違う。これらもわれわれの日常生活に大きな影響を与えるが、それは間接的である。いい方は悪いが、多くの市民にとってそれは「ひと事」である。われわれは毎日の仕事や生活に精一杯で、必ずしも「ひと事」にコミットするわけにはいかない。

だが、コロナ禍は違う。コロナ対策の是非は、国民の生命、健康、生活に直接大きな打撃を与える。その失敗は、また、政権の命運に直結する。

⑤といっても、政権中枢を取り巻く政治家たちに、今までのやり方を改めるよう求めても無理。だから、コロナ対策をめぐり、日本の政治は長くダッチロールを続けるだろう。どこに行くかは、予測しがたい。

おそらくは悪い方に向かう。未曾有の危機の後には、政治は混乱し扇動政治家が権力を握る。それが歴史の教訓である。そうならないことを祈るばかりである。

2 懐疑という武器を使う

①わたしはよく疑う。かなりのへそ曲がりである。考え方に関しては、粘着質である。わたしの思考の原点は「懐疑」である。物事を即断しないで、常識や多数意見や、専門家の意見を疑う。「そうかもしれないし、そうでないかもしれない」と、容易に他人には賛成しない。だからほとんどの場合、少数意見である。

②わたしは手持ちの情報で即断はしない。必ず反対意見を収集し、自説も懐疑して心の動揺を鎮め、それから判断する。「情報→懐疑→判断」の手順を踏んで考える。「懐疑」を介在させるところが、おそらくわたしの特徴である。

懐疑により、まずわたしたちたちは判断を差し控え、次に心の動揺から解放される(哲学者セクストス・エンペイリコス)。

③最近の感染者数の低下傾向は、「飲食店の時短営業の効果」だとする論調が多い。わたしはずっと疑ってきた。手控えメモにこう記している(2021年1月8日付)。

飲食店へ営業時間を午後10時から午後8時までに要請するのも、一定の効果はあるだろうが、きわめて限定的に決まっている。そもそも、「時短効果説」は単なるムード以上に、何の根拠も示していない。時短営業はコロナ禍の本質的対策ではない。迂遠なやり方である。外出制限/地域封鎖/交通規制などが感染対策の王道。その方が、長い目で経済再生が早まる。

④最近「時短効果説にはっきりした根拠はない」とする報道がなされ、わが意を得た思いである(2021年2月5日 日本経済新聞「ニュースな科学」)。

わたしは、今回の感染低下傾向には、別の要因が働いているのではかと疑っている。例えば、感染は一定の波が繰り返すのかも知れず、季節要因もあるかも知れず、変異株が出始める代替期の1時的な感染者数低下かも知れない。要するに、分からない。分からないことを分か

ったつもりで手を打つのは、今までも繰り返されてきた愚策である。

⑤報道によれば、東京都の場合緊急事態宣言解除のレベルは、新規感染者数に換算して 500 人程度らしい。外出制限/地域封鎖/交通規制などの抜本的対策なしに、500 人レベルで宣言を解除しては、「数か月後に第四波到来」という事態にもなりかねない。感染者数が安定的に 50 人～100 人程度を続ける前に、宣言を解除するのは、あまりにもリスクが大きすぎる。

3 脅威の本質は何か？

①では、コロナの脅威の本質は何か？ 3つの要素がある。

(1) 予測不能のリスク

コロナの病状/後遺症と、伝播の態様と、今後の展開は予測ができない。まだまだ手探り状態である。

コロナ禍対策は、今までの常識や手垢のついた古い考え方を捨て、根本的に違った考え方が必要。すなわち「未知のリスクを読む視点」で、この辺で大丈夫だろうと思う 3 歩も 4 歩も手前で手を打つ。

(2) 変化迅速のリスク

コロナの感染と変異は、人間の対応よりはるかに速い。「コロナ・スピード」と「人間スピード」は違う。

迅速に対応しないと、致命的な遅れとなる。1 週間の遅れが、結果的に多くの人命/健康被害に関わってくる。小出し、後出しの対策を打っている暇はない。

(3) 反復被害のリスク

コロナ禍は通常の事故/災害と違い、単発的な災害ではなく、長期にわたって何度も波が襲ってくる。長引くほど、個人にも社会にも深刻な影響を与える。それはしばしば致命的である。

②これらの脅威を念頭に、慎重に、迅速に、長期的な手を打つことが必須である。感染対策が遅れるほど、山は高く谷は深い。感染者は爆発的に増加し、経済は奈落に落ちる。今はまだ感染拡大防止に専念すべき時期である。

4 コロナ禍は「ひと事」ではなく「わたし事」である（2020 年 12 月 16 日記す）

①政界の不祥事が起こっても、われわれにとっては、日々浮かび消え去るあぶくのような出来事の一つに過ぎない。だから、徹底的に追及する時間的・金銭的余裕もない。

だがコロナ禍は違う。わたしや家族の命や運命に直接かかわる問題である。

②特に、中高年にとっては、自らの命、老後の生活、その後の人生に直結する切実な問題。この点が、並みの政治問題とは決定的に違う。政府は、このようなコロナ禍の構造と意味を完全に見誤っている。今までのように、言葉でごまかし、すり替え、言い逃れして、民意を抑え込むことはできない。

③コロナ禍は中高年にとってだけ深刻な問題ではない。

若者にとっても、勤め先の閉鎖、解雇、破産により収入は激減。やがて生きるすべを失う。コロナ対策が失敗すれば、大失業時代、大氷河期がやってくる。これが若者をとりまくリアル。コロナ禍は「ひと事」ではない。若者にとっても明日はわが身である。「ひと事」はやがて「わたし事」になる。

④このように、中高年にとっても若者にとっても、コロナ禍は国民の生存を直接脅かす「わたし事」である。すべての国民の生命、身体、自由に直接関わってくる。

生命、身体、生活は、国民の最低限の要求である。それさえ守ることのできない政府はいらない。

われわれは、生命や身体や財産の保護を、現政権に白紙委任したわけではない。わたしのような小市民にとっても、政府のコロナ対策の小出し、出遅れ、方向違いは到底許しがたい。菅政権はわれら夫婦、わが家族の命運を託すに足りない。

5 権力者はなぜコロナ対策に失敗するか？ （2020年7月30日記す）

①古来、天変地異、疫病、自然災害は、時の権力者にとって鬼門だった。多くの権力者が災害対策に失敗し、歴史から退場した。国民の生命や生活さえ保障できなければ当然だろう。

②コロナ禍も同様である。権力者は利益誘導、懐柔、恫喝、プロパガンダ、嘘とごまかしで人を従わせることはできる。人間相手にはアメとムチが効く。

しかし自然相手では、いくら権謀術数を尽くしても、無意味である。コロナはコロナの摂理に従って動く。

③強権、剛腕政治家ほど失敗する。凡庸な政治家ほど、コロナ禍によく対処できない。コロナ対策の失敗で、今後、世界でも多くの強権、剛腕、凡庸な政治家が失脚するだろう。彼らは大衆の人気取りに走り、経済再開のプレッシャーに負ける。大局的/俯瞰的な立場から、国民全体の立場から考えることができない。彼らにはそのような資質はない。常に短期的な利害打算で動いてきたツケである。

④これら政治家の誰が権力からすべり落ちるか、実に興味深い。というより、わたしは彼らの退場を期待している。そうなれば、コロナ禍は単なる感染症にとどまらない。歴史を変える大きな転換点になる。ただし、彼らが退陣した後に、よりよい政権を期待するのはおそらく幻想に終わる。歴史の皮肉だが、われわれは「アラブの春」からそれを学んでいる。

6 新型コロナの黙示録：「市民の乱」はこうして起こる

①因果の本質は、偶然の連鎖に過ぎない。ちょうどサイコロの目を出すようなもの。必然の結果など何もない。小さな事象が、われわれの予想外の大きな結果をもたらす。因果がどう転ぶかは、全くの偶然である。

因果論については、ベンジャミン・フランクリンの教えが興味深い（『プロ弁護士の「勝つ技法」』217 ページ参照）。

釘が1本抜けて蹄鉄^{ていてつ}が取れ、蹄鉄が取れて馬が倒れ、馬が倒れて乗り手は敵に追いつかれて殺されてしまう。落命の原因は、釘1本を確認する注意を怠ったためである。

②コロナ対策も、これと同様である。一つ一つの対策の巧拙が、その後の感染者数に予想外の大きな影響を与える。一つの対策が失敗すれば感染は拡大し、もとの因果に戻る事はない。あわてて対策を強化して、もとの感染者数に戻ったとしても、それまでの間にもとの因果の流れは変質している。それはもはや前の因果の延長ではなく、異なる因果の流れである。

楽観、中間、悲観のどのシナリオに転ぶかは、一つ一つの感染対策しだい（第4回 6②参照）。今年中に収束するかもしれず、数年かかるかも知れず、回復まで数年から10年を要する大災害となるかも知れない。

③菅政権は、事実上経済を優先させて、すでに数々の失敗をした。今後も同じ間違いを繰り返すだろう。ワクチンが目覚ましい効果をあらわさない限り、悲観的シナリオが現実味を帯

びてくる。今はその瀬戸際である。

④時期を失したコロナ対策の失敗は、全国民にとって悪夢となる。その怨嗟は、やがて現政権だけでなく、政権与党全体に及ぶだろう。こうして「市民の乱」が起こる。コロナ禍はそれだけの可能性を含んでいる。

政権与党の命運もコロナの前には意外に脆いかも知れない。政変だけでなく、与党の崩壊、分裂、そして全く新しいリーダーの出現。それがどうなるかは、今は混とんとして読むことができない。